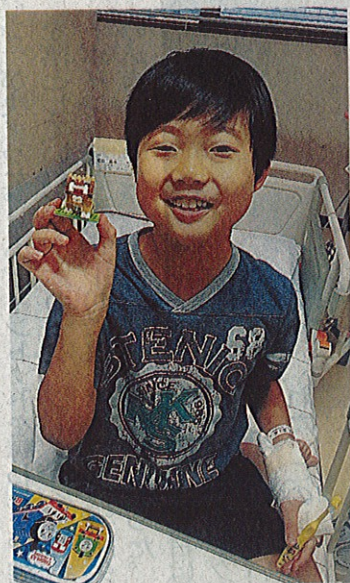


# 病室から 休み時間も友達と

いま No.1504  
子どもたちは

病児教育にICT 2

昨年6月、鳥取県の米子市立就将小学校3年だった稲田晶斗さん(10)は、小児ネフローゼ症候群と診断された。血液中のたんぱく質が尿と一緒に流れ出てしまう腎臓の病いだ。鳥取大付属病院に入院し、同小学校の院内学級「ひまわり」に転籍した。



入院中に病室で笑顔を見せる稲田晶斗さん＝鳥取県米子市、母かおりさん提供

2カ月ほどで退院できると、口に運ぶようになった。感染思われたが、薬が効きにくいタイプで、治療は長引いた。スポーツ万端で夢はサッカー選手だったのに、運動は禁止。塩分も厳しく制限され、食事の時間は「おいしくない」とこぼしながら食べ物を

院。寂しい気持ちと退屈な時間を持て余した。分身ロボット「OriHime」の活用が就将小で本格的に始まったのは、その頃だった。ロボットは、病院にクラス

が動かしてくれた」この春に退院後、スムーズに学校に戻り、4年生に進級することができた。ただ、7月に再発。夏休みは治療が続いた。薬で免疫を抑えているので、今も学校ではマスクが欠かせない。それでも少しずつ日常を取り戻し、10月のマラソン大会では1・5キロを完走した。以前のように優勝はできなかったが、走れるようになった喜びを感じた。

その後、同室だった6年生の男子と仲良くなり、明るさが戻ったが、秋にその子は退院。その後、同室だった6年生の男子と仲良くなり、明るさが戻ったが、秋にその子は退院。その後、同室だった6年生の男子と仲良くなり、明るさが戻ったが、秋にその子は退院。

入院して思ったことがある。もっと多くの分身ロボットが病院にあれば、喜ぶ子どもが増えるはず。将来は、そういうロボットを作る仕事もしたい。サッカー選手以外の夢ができた。

(上野創)